

# ワカケホンセイインコ (*Psittacula krameri manillensis*) のねぐら環境の報告

○松永聡美 藤井 幹 (公益財団法人 日本鳥類保護連盟)



ワカケホンセイインコ *Psittacula krameri manillensis* は1960年代後半に日本で分布を広げた外来種で、現在、東京都を中心として神奈川県、埼玉県に広く分布する1,500羽を超える大きなグループと、群馬県に50羽程度、千葉県に20羽程度の個体群が確認されるのみとなっている。東京都を中心とするグループは、長年一つのねぐらを利用していたが、そのねぐらが環境の変化により消滅し、その後いくつかのねぐらが確認された。

本調査では群馬県のグループのねぐらも含め、7つのねぐらの周辺環境を整理し、どのような環境がねぐらに適しているか考察を行った。

## ねぐらの周辺環境

### (1) ねぐら面積

7つのねぐらの面積を航空写真により測定したところ約200㎡～1200㎡程度のまとまった緑地がねぐらとして使用されていることが確認された。

### (2) 樹種

樹種はイチョウ、ヒマラヤスギ、オオバボダイジュ、ケヤキ、竹林が使用されていた。ねぐらCにおいては、ねぐらに使われている樹木が落葉する時期になるとそのねぐらが使用されなくなることから、捕食者から見えやすい環境を避けていることが推測される。イチョウも落葉樹ではあるが枝ぶりが細かく、捕食者が容易に飛びかかって攻撃できない為か落葉する時期においても使用されていた。またヒマラヤスギや竹林においても外側から捕食者に見えにくい樹種を選択していると考えられる。



ヒマラヤスギねぐら



イチョウねぐら



ケヤキねぐら



竹林ねぐら

### (3) 高木率

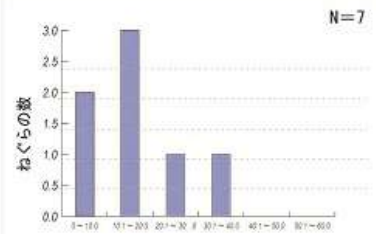
半径100m以内の高木の割合を航空写真により測定したところ、0～10%が2箇所、10.1～20%が3箇所、20.1～30%と30.1～40%がそれぞれ1箇所となり比較的開けている環境を利用していることが確認された。またねぐらの場所は道路沿いや川沿い、空き地沿いなど全てにおいて開けた空間に面していた。これは捕食者からの襲撃が目視しやすいくと、襲撃を受けた際に逃げやすいようにこのような環境を好んでいると考えられる。

### (4) 利用されている場所

利用されている場所は住宅地が3箇所、公園が2箇所、大学キャンパスと農耕地がそれぞれ1箇所であった。ねぐら面積、樹種、高木率などの条件を満たす環境としてこのような場所が選ばれていると考えられる。またねぐらBはテニスコートが隣接していることからライトの明かりが強く、ねぐらD・Eにおいてもねぐら内に街灯が設置されており明るい環境であった。他のねぐらも道路と隣接しており、ある程度の明るさを保っていることが確認された。これらのことから捕食者を目視しやすいく明るい環境を好んでいることが推測されるが、駅前にねぐらができるケースは報告がなく、明かりの強度もしくは人通りの多きなどもねぐらの場所を選ぶ際の要因になっていると思われる。



環境	樹種	ねぐら面積(㎡)	ねぐらの構成種
A	大学キャンパス内 イチョウ →イチョウ →イチョウ	300.85 →137.96 →228.41	オオホンセイインコ ダルメインコ ムジボウシインコ アオボウシインコ →ダルメインコ ムジボウシインコ(付帯)
B	公園 ヒマラヤスギ →ヒマラヤスギ	163.25 →367.35	ダルメインコ →ダルメインコ
C	公園 オオバボダイジュ →ケヤキ	646.06 →606.59	カラス →カラス(付帯)
D	住宅地 竹林	1167.12	キジト
E	住宅地 竹林	1057.2	ムクドリ
F	住宅地 竹林	206.74	ムクドリ
G	農耕地 竹林	1294.37	スズメ ムクドリ キジト オナガ キジ カオジロカビチョウ ガビチョウ



ねぐらから半径100m以内の高木率(%)



テニスコートに隣接したねぐらの様子



ねぐらの下は葉が多数落ちている

## ねぐらの構成種

ワカケホンセイインコのねぐらでは、ワカケホンセイインコ以外の種もいくつか確認されている。ねぐらAでは同じオウム目の鳥が集まっており、お互いに集まることで捕食者対策を行っていると考えられた。しかしねぐらGにおいては集団ねぐらを取る習性のないものも集まっており、お互いに適したねぐら環境であったためにたまたま同じ場所を利用していると推測される。ねぐらE,Fにおいては集団ねぐら形成する種同士が集まったようにも思えるが、似た環境を利用しているのでもたまたま集まっていた可能性もある。ねぐらCにおいては捕食者のカラスとねぐらと共にしている珍しいケースであった。

またねぐら入りの際はどのねぐらにおいても就寝前集合を行っていた。



ダルメインコ (左)



ムジボウシインコ (左下)



ねぐら入り前に電線に集合する



ねぐらを襲撃するハイタカ

ハイタカに襲撃されねぐらから飛び出したワカケホンセイインコとムクドリ

## 分散による個体数増加の懸念

個体数は2005年12月に東京工業大学が行ったカウント調査によると、1,300羽程度だが、2017年12月に当連盟で行った同様の調査では1,500羽程度で若干の増加傾向を示している。これは先に述べたように長年一つしかなかったねぐらが分散したことにより、行動圏も拡大し、利用できる環境が増えたことが関係していると考えられる。また住宅地にねぐらが増えると糞害や騒音問題といった住民とのトラブルが増加することが懸念される。

## 今後の課題

長年利用していたねぐらを離れたことで現在は各地でねぐらが出来ては消えるといった不安定な状態にあり、その為行動パターンも以前とは変化していることが予想される。今後ラジオテレメトリー調査により、複数出来たねぐらをどのように利用しているか、また幼鳥がどのように分散するか行動パターンを明らかにすることで、本研究で整理したねぐら環境の傾向と共に分析し、分散のメカニズムを探りたい。また光との関連性においても定量的なデータを取得できるような方法を探り、ねぐらに適した環境についてさらに分析を進めたい。

ワカケホンセイインコの目撃情報募集中!  
(公財)日本鳥類保護連盟ではワカケホンセイインコの情報を随時募集しております。飛んでいるところを見た、こんな物食べていた等どんな些細な情報でも構いません。もし見かけたら下記までご連絡いただければ幸いです。

〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5, 3F  
公益財団法人 日本鳥類保護連盟  
調査研究室 松永 聡美  
TEL : 03-5378-5691 FAX : 03-5378-5693  
e-mail : research@jspb.org